
老師の称号はいりません

朝霧零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

老師の称号はいりません

【Nコード】

N9542Q

【作者名】

朝霧零

【あらすじ】

ネギ？ 誰ですかそれは？ 10歳の子供先生で関わるとめんどくさい人？

へえーそんなことより格闘少女をどうにかできませんか？

無理ですか。そうですか。

格闘技やったことないのに老師は嫌だなあ。って話しです。

ネタで書いているので続くかどうかは不明です。

気分が乗ったら更新するかも…（奇跡は起きないから奇跡って言うんですよ？）

続くか分からない話（前書き）

ネタ、やっつけ、思いつきで作られた話ですので期待はしないでください。

期待する人の方が少ないと思いますが。

続くか分からない話

それはたった一言から始まった。

side クーフエイ

「アイヤーもう居ないアルカ？」

私は下校途中の道端でいつものようにかかって来る敵を返り討ちにしてたアル。

いつもと同じように……アル。

私は周りからバカだと言われていてバカイエローなんて呼ばれているアル。

自分でも自覚していてそれでもなんとも思っていなかったが、最近少し悩んでいるアル。

もちろん勉強じゃないアル。

私の大好きな武術でアル。

この悩みはきつと誰もが一度は経験があるもので、皆は乗り越えてきた悩みでアル。

そう、私は今スランプになっているアルヨ。

腕が落ちたとか思ったように動けないとかじゃないアル。

強くなってる実感がなくなっているアル。

昔は一日ごとに自分が成長しているのが分かり楽しくてし方がなかったアル。

それがここ最近昨日の自分と比べてもおとといの自分と比べても全く変化を感じられないアル。

武術に焦りは禁物だと分かっているにも初めての事ゆえに戸惑っているアル。

こういうときは師が導いてくれたり、教本などからヒントを見つけたりできればいいのだけど…。

本を読む頭がないのが悔やまれるアルヨ。

「はあゝ。もつと強い相手はいないアルカ……」

せめて師も本も無理ならライバルでもないアルカと呟いた私はきつと贅沢者ネ。

それでももつい願わずにはいられなかったアル。

もつと強くなりたかったから。

そんな私に聞こえてきた言葉。

「最後のやつもつと腰が使えればパーフェクトだったな」

それは私の運命の出会いというものだったアルヨ。

side ???

「今日の挑戦者は強かったな」

工学部の帰り道俺は今日の対戦を思い出しながら歩いていた。

対戦とは最近工学部が作成したRDDR（リアル・ダンシング・ダンシング・リボルバー）のことである。

これはフィールドの中に入り画面に映っている人と同じようにダンスを踊りその完成度で得点を決めるゲームである。

なんでもよく分からない技術を使っているために装置が工学部の部屋にしかない。

遊ぶのにいちいち工学部に行かなければならないが、それをしてで

も遊ぶ価値のあるゲームだ。
密かにブームになっていてやりたがるプレイヤーは多い。

しかし、遊ぶのには工学部の人が必要なため一週間に一度しか遊べない。

そうなると当然取り合いになる。

そこで工学部の連中は一月に一回大会を開きチャンピオンは優先的に遊べるようにした。

そしてそのRDDRの初代チャンピオンにして現在3度目の防衛を果たしたのは波羽峰 朔真。

俺のことだ。

チャンピオンの特権で練習しまくったおかげで他の奴よりうまい自信がある。

そして今日も大会を終え帰る途中ってわけだ。

「来週には新曲も入るらしいしまた練習しないとな」

今日は勝てたが来月も勝てるとは限らない。

踊る曲は毎回ランダムで苦手な曲に当たれば負ける事だってありえる。

今回は1番得意な曲がきたから楽勝だったけどな。
それにしても

「最後のやつもつと腰が使えればパーフェクトだったな」

悔やんでも悔やみきれないものがある。

「最後に腰をもつと捻れば完璧だったのに」

「腰アルカ？」

「そう腰。足より先に出す勢いで捻っていけば……くうくおしい！」

「十分捻ったと思ったアルが？」

「足りない足りない。やりすぎたかって思うぐらいがあればちよ
うどいい」

「な、なるほどアル」

ん？ そういえば俺は誰と話をしているんだ？

side クー

「最後に腰をもっと捻れば完璧だったのに」

最後の技は崩拳。

震脚から腰への連動を経て腕へと衝撃を伝える技。

「腰アル力？」

「そう腰。足より先に出す勢いで捻っていれば……くうくおしい！」

ここまで言われるのはよっぽど悔しかったアルネ。
それだけ私に期待をかけてくれていたのアル力？
でも、

「十分捻ったと思ったアルが？」

震脚から腕への連動には腰は重要だとわかっているアル。
自分では十分に腰を回していたと思ったアルネ。

「足りない足りない。やりすぎたかって思うぐらいがあればにはちょうどいい」

「な、なるほどアル」

ここまで断言するからにはよほどの自信があるみたいアルヨ。

「なら少し見て欲しいアルヨ」

「あ、ああ」

少し詰まったのが気になったアルが今は集中ネ。
腰をやりすぎと思うぐらいに捻るアル。

足より先に出す勢いらしいアルヨ。

イメージはできたアル。

いく……アル！

「霸っ！！」

な、なにアル……この感覚は！

今までとは比べ物にならないぐらい突き抜けた感じだったアル！

「す、すげえ」

「すごいのは貴方アル！ 一目で私の悪いところを言い当てたネ！」

「はっ！？ いやいや！ 俺は何もしてねえよ。お前が天才なんだ

って」

「そ、そんなことないアル」

「いやいや。すご〜って」

自分のことは棚に挙げてずるいアル。

それよりこの人はすごく強いアルネ。

見かけは弱そうなのに一目で的確なアドバイスができるのは達人しか考えられないアル。

「私は古菲アル！ 貴方の名前は何アルか！？」

「へ？ 俺は波羽峰 朔真だけど？」

「朔真老師って呼んでいいアルか！？」

「ろ、老師？！ な、なんで？」

「これからもコーチして欲しいアルヨ」

「いいよ、いいよ。」

「あ、ありがとうアル！ それじゃあ老師明日は武道館で待ってるアル！」

老師はいい人アル！

二つ返事で受けてくれたアル。

これで私はまた強くなることができそうアル。
明日が楽しみアルヨ。

side 朔真

「なら少し見て欲しいアルヨ」

「あ、ああ」

何だろう？

ていうか誰だろう？

そして俺は何を見ればいいの？

うん。状況がさっぱりだ。

彼女が何か構え始めたけど…格闘技か？

あいにく格闘技とは無縁の生活だったから何の型かは知らないけど。

「覇っ！！」

「す、すげえ」

気合と共に打ち出された拳は素人が見てもすごかった。

うん。すごすぎてよく分からなかった。

速すぎて目が追いついてないからしょうがないよね？

「すごいのは貴方アル！ 一目で私の悪いところを言い当てたネ！」

「はっ！？ いやいや！ 俺は何もしてねえよ。お前が天才なんだって」

うん。よく分からない事を言われたが彼女が天才ってのは分かるぞ。あとは分らんが。

何で格闘技の型を俺に見せたのかとか……。まあ、話の流れが1番分らないのだけだね。

「そ、そんなことないアル」

「いやいや。すぐって」

「私は古菲アル！ 貴方の名前は何アルか！？」

「へ？ 俺は波羽峰 朔真だけど？」

「朔真老師って呼んでいいアルか！？」

「ろ、老師？！ な、なんで？」

こ、これってドッキリか何かなのか！？
本当に話しが分からん。

誰か俺に説明を要求するぞ！

「これからもコーチして欲しいアルヨ」

「いいよ、いいよ。（否定）」

俺にコーチとか無理だし。

格闘技なんかやったことがないのにどうしてコーチなんかしなくちゃならない！

これは宗教勧誘の格闘技版なのか？

クーフェイだっけ？

変なのと関わっちゃたなあ。

「あ、ありがとうアル！ それじゃあ老師明日は武道館で待ってるアル！」

……あれ？

なんか承諾したことになってる？

どうして？

俺は確かにいいよって断ったよな？

あ…そういうば友達が勧誘はいらないってきっぱり断らないとダメって言ってたっけ。

いいよ（遠慮）だと良いです（肯定）って受け止めるとか。

…ミスった？

あれ？ 俺ってこれからどうなるの？

続くか分からない話（後書き）

思い付きから完成まで3時間の作品であるがゆえに誤字脱字はあるかも。

そして、クーの話し方がおかしいなんてデフォなので気にしないで欲しいアルヨ。

作者は基本アルヨをつければいいと思ってるので。

矛盾がある？ それも気にしてはいけないよ？

なにせ作者は原作を5巻までしか読んでないからね！

あまりにも続けて欲しいとの声がありそうなら続きを書くかもしれない。

あくまで予定は未定ってことで。

クーはこうしてヒロインになるようだ。（前書き）

次回策のネタがやはり出来ていない作者……朝霧 零です。

続かないといいつつ2話目を書いてしまったが、いやゝ難産でした。
やはりプロットとかを確り作らないと難しいですね。

まあ、頑張っで書いたので楽しんでいただければ幸いです。

クーはこうしてヒロインになるようだ。

勘違いとは第三者の方が起こしやすいものである。

side 朔真

今の俺はすごく悩んでいる。

武道館に行くか行かないかで。

行けばあのクーって娘に絡まれるのは分かりきっているが、行かないのも恐ろしい気がする。

なぜ絡まれるのか昨日ずっと考えてみたがいつこうに分からずもう既に放課後間際だ。

教卓の前で先生が明日の注意事項を言っているがそれが終わったらタイムリミット。

いったいどうしたものか……。

「起立、礼」

……って終わるの早！

うえっバックレた方がいい気がしてきた。

「おーい、朔真。お前に彼女来てるぞ！」

「は？ 俺に彼女なんていないぞ？」

「いいから早く来いよ」

な、なんだ？

いきなり彼女とか。

心当たりなんて……あ、る？

ははは、まさかねえ。

「朔真老師、待ってたアルヨ！」

……なんでいるのだろうかこの娘は。
まさか男子中等部にまで来るなんて。

「朔真。危険なのは夜道だけだと思うなよ」

おかしいね。

君と僕は良好なクラスメートの関係を作っていたと思っていたのにね。

なんでこんな事言われなくちゃならないんだろうね。

思わず死んだ魚のような目になった俺は悪くないと思う。

side クー

「クーちゃんご機嫌だね？ どうしたのかにゃー？」

「ゆるなアルカ。実は老師ができたアルヨ」

「えっ！？ 老師？」

「そうアル。今から鍛錬が楽しみアルヨ」

「ちよつと待ったー！　そういつのはこの朝倉和美に話さないダメじゃない！　それでそれで、老師って何？　どういう人？　男？　女？　歳は？　名前は？　どこまで関係が進んでいるの？　出会のきっかけは？」

「ちよ、ちよつと待つアルヨ」

「……はい、待った。で？　名前は？　どこであつたの？」

「あわわゝに、逃げるアル！」

「ちよ、ちよつと！　くーちゃん！？」

あややゝ失敗したアル。

朝倉に言うのはダメだったアルヨ。

それよりこれからどうするアルカ。

少し早いアルが老師のお迎えに行くのもいいかもアル。

それに老師が武道館の場所が分かるかも不安アル。

よし！　そうと決まれば早速いくアルヨ。

……クラスとか分からないアル。

むむ、どうしたものアルカ。

まさか玄関で躓くとは思わなかったアル。

「クーフェイさん？　どうかしましたか？」

「茶々丸アルカ？　実は朔真老師のクラスが分からなくて困ってたアルヨ」

「朔真老師？ 検索……ヒット6件。 上の名前は分かりますか？」

「波羽峰 朔真アル」

「ヒット。 男子中等部の2・Dクラスです」

「本当アルカ！？ ありがとうアル！」

「その朔真老師とはどんな人なんですか？」

「どんな？ そうアルネ……」

朔真老師は昨日あったばかりでよく分かってないアル。
でも、大事な師でアル。
それに優しそうな人だったアルヨ。

「優しくて大事な人アル」

「そうですか。頑張ってください」

「ありがとうアル」

クラスも分かったし早速向かうアル。

「茶々丸こんな所に居たのか」

「あつマスター申し訳ありません」

「いや、いい。何かあったのか」

「はい……クーフエイさんに大事な人が出来たそうです」

「なに！？あの格闘バカにか？明日は災害でも起きるのかもしれんな」

「それでは今日中にハカセにメンテナンスをして貰ってきます」

「ああ、そうだな（明日にはクラス中に広まってそうだな）」

2-D見つけたアル。

「起立、礼」

タイミングもばっちりアルネ。

「おっ？なんで女子がここに？」

「朔真老師居るアルか？」

「朔真老師？朔真のことか？」

「そうアル」

「あゝ居るけど何のよう？」

「迎えに来たアル」

「あん？　一緒にどこか行くのか？　てことは彼女？」

「違うアル。朔真老師は私の師匠アル」

「あゝ！（RDDRのことか）　よくこんな娘引つ掛けたなゝ」

むっ！

良く分からないアルが老師を悪く言うのは許せないアル。

「あはは、そんな切れんなって。そんなに朔真が大事か？」

「当たり前アル！　私の大事な人アル！」

「おゝ！（結構本気ぽいな）まあ、ちょっと待ってる。　おゝい、

朔真。お前に彼女来てるぞ！」

「だから彼女じゃないアル！」

「いいから早く来いよ」

この男聞いてないアル。

っと、老師が来たアル。

「朔真老師、待ってたアルヨ！」

早く武道館で鍛練がしたいアルよ。

わくわくしてきたアル！

「（くっそ〜！　幸せそうでム力つく！）朔真。危険なのは夜道だけだと思っなよ」

むっ！ 小声で言っても聞こえてるアル。
きつとこいつは老師の敵アルネ。

老師も感情のない目で見てるから間違いないアル。
私でも一瞬ゾクツてくる目ネ。

流石老師アル。

「ああ〜クーフェイ？ なんで居るの？」

「迎えに来たアル！ それとクーでいいアル」

「あゝ迎えね。……行きたくないなあゝなんて？」

「どうしてアル？ 早く行くアル」

動こうとしない老師の手を引っ張ってみたら以外に力が強いアル。

足腰と腕の力があるから動かないアル。

細身の体つきなのにやっぱりちゃんと鍛えているアル。

でも武道館に来ないのは努力を見せたがらない人アルね。

影で努力をする人も嫌いじゃないアル。

手も豆だらけで固いアル。

この豆の出来方は重量のある獲物を使っているアルね。

「あ、あゝ……クー？ そんなに手を撫で回されると恥ずかしいの
だが」

「ふえ？ 恥ずかしがる必要はないアルヨ」

この手は十分に誇っていい手アルヨ。

「えっ？」

そんなに驚くなんて。

隠れて修行してたから、褒められた事が少ないアルネ。

これからは私が老師を確り見て褒めるアル。

師を立てるのも弟子の仕事アルヨ！

「わかった。分かったよ朔真。お前彼女と仲がいいのをクラスに見せびらかしたいんだな？」

この敵はまだいたアルネ。

「ちょ！？　ち、ちがうからな！」

老師が少し臨戦態勢アル。

老師の実力を見るチャンスアル。

「くそ！死ぬ！」

い、一瞬だったアル！

顔めがけて放たれた拳を首を傾げるだけで交わして下からの左掌底であごを打つ。

相手も気配だけで交わそうとしたアルが相手の動きを見切って上手くあごに入れているアル。

綺麗過ぎる流れアル。

あれを私がやろうと思ったたら相手と何度も練習しないと出来そうにないアル。

これが老師の実力アルネ。

「行くぞ。クー」

なるほどアル。

さっきまで行きたくなかったのは敵を倒してなかったからアルネ。
老師の考えを汲み取れないなんてまだまだ修行不足アル。
武道館では確りと修行をして老師の期待に応えなきゃアル。

「わかったアル」

これから老師と私の修行が始まるかと思うとワクワクするアルヨ。

side 朔真

「ああ、クーフェイ？　なんで居るの？」

薄情な友人Aを無視してクーフェイをどうにかしよう。

このままじゃ毎日来られるかもしれない。

……明るくて良い娘そうだけど、ストーカーじゃないかな？

「迎えに来たアル！　それとクーでいいアル」

「あゝ迎えね。……行きたくないなあゝなんて？」

「どうしてアル？　早く行くアル」

うん。この娘すごく力強いね。

おかしいな。

俺ってこれでも家が酒屋で手伝いしてから力は強いはずなんだけど
……少し自信なくしたかも。

俺本気で踏ん張ってんのにこの娘余裕そうだし。
って、何でこの娘は俺の手を撫で回してんの？
豆だらけの手って珍しいのか？

酒瓶運んだと豆とか結構出来るんだよね。

……珍しいのは分かるけどそろそろやめて欲しかったり。
クーの手がやわかくて気持ちいいのは分かったからさ。

「あ、あゝ……クー？ そんなに手を撫で回されると恥ずかしいの
だが」

「ふえ？ 恥ずかしがる必要はないアルヨ」

「えっ？」

この娘に羞恥心てないの！？

俺は恥ずかしいですよ！

クラスに注目されてるし……ってクラス！？

ああゝそうだよな。

俺頑張って動かなかったし。

素直に動いとけば良かった。

はゝ。きつと友人Aはこういう時”あれ”をするんだろうな。

めっちゃ見てるし。

あつ笑った。

「わかった。分かったよ朔真。お前彼女と仲がいいのをクラスに見
せびらかしたいんだな？」

「ちょ！？ ち、ちがうからな！」

うん。

この流れはプランBだね。
俺こいつと頑張って練習したんだわ。

「くそゝ死ね！」

殺陣を。

練習道理に來た右ストレートを首を曲げて交わし、俺が掌底のアップでカウンター。

本当は右でやるんだけどクーが握ってるから左で掌底。

……あ。

この後俺の左手側に避けるはずだから……当たりますよねゝ。

あ、あははゝ。綺麗に入りすぎて気絶しちゃったぜ！

と、とりあえず逃げるか。

「行くぞ。クー」

「わかったアル」

ちなみに武道館じゃないぞって言うても通じないんだろうなあゝ。

クーはこうしてヒロインになるようだ。（後書き）

修行場へとたどり着いた2人。

そこで待ち受けていたのは思いもよらない人物が！

閃光と怒声が蔓延る場所で朔真とクーの命運は！？

「老師！ あぶないアル！！」

「俺にかまわず先に行け！ 時間稼ぎはあまり出来そうにない」

次回「和美乱入！ スクープは鮮度が大事！」お楽しみに！！

……嘘です。

ネタも出来てないのに予告を試みたアホな作者です。

次はいつたい何時更新するのだろうか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9542q/>

老師の称号はいりません

2011年3月25日17時16分発行